

1. 症例を大切に

朝夕秋風が心地良く感じられますが、養豚家みなさまにおかれましては大過なくお過ごしのこととご拝察致しています。

「1症例を大切に」この言葉は、千葉県農業共済組合連合会の元参事であった伊藤幸次先生(故人)が色紙に書き、各診療所の片隅に額に入れて掲げてありました。最近、管内の養豚場を巡回しますと、オーエスキー病やPRRS、PMWS、アクチノバチラス病(以下App)、パストツレラ病(以下Pm)、マイコプラズマ病(以下MPS)、豚萎縮性鼻炎(以下AR)、レンサ球菌症、大腸菌病(浮腫病)およびサルモネラ病などのPRDC(豚の呼吸器複合感染症)に汚染されている農場で、死亡事故が多発傾向にあります。

このような農場を良く見ますと、数十頭や数百頭単位で死亡しているのではなく1日2~3頭位の場合が多いようです。しかし、1ヶ月の累計で見ると数百頭となり、年間の累計では数千頭になります。そして、年間の死亡事故率が20~30%に達している農場を良く見かけます。何故このような高い死亡率になってしまうのか、良く聞いて見ると「1日1~2頭位は」と安易に考えている経営者もいます。また「うちの農場はPRRSやPMWS、ADおよびAppに汚染されているのだから」と諦めている経営者も時々見かけます。

さらに、発咳や腹式呼吸などの呼吸器症状を呈していると、十年一日の如く同じ抗菌性物質を使用している農場も多く見かけます。一方1~2頭続けて死亡すると「何故だろう」と病性鑑定を依頼する堅実の経営者もいます。

私の約三十八年近い獣医師生活の中で見たこともない疾病に遭遇したことや、新たな疾病の発見もありました。それは、家畜保健衛生所や大学、農水省家畜衛生試験場(現・動物衛生研究所:動衛研)および各種研究機関の諸先生方に病性鑑定を依頼し協力して頂いた賜物だと思っております。養豚家の皆さんも豚が死亡したら、「何故だ」と思う気持ちを絶えず持って「1症例を大切に」してください。思い込みや諦め、決め付けてしまっている死亡豚の中に意外な疾病が潜んでいて、著しく経営を圧迫していることが多々あります。

そこで、私がどのような経緯で疾病に遭遇し、発見をしたか記して見たいと思います。

1. レンサ球菌症

1982年頃、ある農場の離乳子豚舎で突如遊泳運動などの神経症状を呈して急性経過を辿り死亡する豚が散発的に見られました。私はトキソプラズマ病を疑いスルファモイルダブソン(抗原虫薬)を使って治療していたのですが、全く症状が好転しませんでした。そこで、日本獣医畜産大学の寺田厚先生に病性鑑定を依頼しようと思い病死した豚を剖検して、材料を送ることにしました。通常は心臓や肺、肝臓、脾臓、腎臓およびリンパ節などの材料を送っていたのですが、単なる思い付きで「脳も調べて貰おうか」と考え調べて頂く事にしました。数日して寺田先生から「レンサ球菌のC型菌が高濃度に分離された」との報告がありました。

レンサ球菌病は、すでに月刊雑誌に鳥取県で1981年に東量三先生らによって発見され、「ストレプトコッカスR群菌感染症」の病名で掲載されていました。また、薬剤感受性検査の結果からペニシリンの効果が極めて高いことを初めて知りました。その後、農家や私がトキソプラズマ病と思い込んでいた疾病にペニシリンを投与すると画期的に治癒したので、「へボ獣医」の汚名を返上することができました。このように、レンサ球菌病は「脳も調べて貰おうかな」の単純な思いつきから、発見されたものと思っております。

2. オーエスキー病

オーエスキー病は、わが国では1981年に山形県で初めて発生が報告されました。発生当初は「仮性狂犬病」の病名で呼ばれており、「千葉県で発生したら大変なことになる」と思っておりました。1983年4月1日に、何時もの通り診療をしていました。夕方になって農場から産褥熱の往診の依頼が入りました。一通り治療して帰ろうとすると畜主から「先生2~3腹哺乳豚がおかしいので見てくれ」と言われました。よく見ると、今まで見たこともない間代性痙攣や後駆蹠踉、体の不協調、眼球のしんせんなどの症状が見られ、末期症状の豚は奇声を発して音に過敏で口角から泡沫性の流涎と四肢が伸展し遊泳運動など特異的な症状を呈していました。

「ひょっとしたら」と思い、薬品販売会社の営業担当者から戴いた、山形県で発生した仮性狂犬病の発生報告例が新聞に掲載された、切り抜きが有るのを思い出しました。夢中になって読むと目の前にいる豚の症状が仮性狂犬病に全く酷似しているのです。「これは大変なことになったな」と思いました。

しかし、翌日は家畜臨床研修所へ出張でしたので、先ず渡邊君(現・株式会社ピグレッツ代表取締役)に連絡を取り、翌朝家畜衛生保健所に届け出ること、臨床症状を経過観察して写真に撮っておくように指示しました。

さらに、その晩に近隣の農場と連絡をとり、オーエスキー病様の病気が発生した旨を伝えました。その後、一週間程して県から「千葉県でオーエスキー病が発生した」との通達がありました。この例も畜主の何気ない「おかしい病気では」と思ったこと、新聞の切り抜きなどを持っていたことなどの偶然が重なって、この疾病の発見につながったものと思っております。

3.PRRS (豚繁殖・呼吸器障害症候群)

1998年頃から、Appの1、2、5型が診療所管内の養豚場で猛威を振るい、毎日夜遅くまで治療に追われていました。特に、Appの1型が発生している農場では多剤耐性株が多く、同じ抗菌性物質を数日間使用すると耐性を獲得してしまい治療に困難を極めておりました。

しかし、発症した子豚の臨床症状を観察するとAppと若干異なり、激しい腹式呼吸や貧血、削瘦などの慢性経過を辿って死亡していました(ヘコヘコ病の名はこの症状を見て畜主が呼んでいたことに由来する)。また、剖検してもAppやPmおよびMPSなどのように、病巣部と健康部が明瞭でなくヘコヘコ病は不鮮明で、一見すると健康な肺ではないかと思われました。そこで、「何故呼吸器疾患で死亡しているのに肺に病巣が見られないのか」と思い病性鑑定を動衛研の山本孝史先生に依頼しました。数日して「カリニ性肺炎が疑われるから、オリメトプリムでも投与したら」の指示がありました。しかし、オリメトプリムを投与しても症状は全く好転しませんでした。その後、「家畜衛生試験場へ来て事情を説明してくれないか」との電話があり、何と各研究室の部長や室長などの先生方が集まっており、農家の窮状や発生状況を熱心に質問やら聞いて頂きました。また、渡邊君に繰り返し病畜を運んでいただきました。そして、ついに1993年4月に欧米各国でミステリー病や青耳病および青い流産などの病名で呼ばれている疾病であることを突き止めていただきました。

この症例も「1症例を大切に」したことや、家畜衛生試験場の諸先生方のたゆみない努力の結果だと思っています。

4.サーコウイルス2感染病 (PMWS)

夕方になって、大和田先生から「山本先生!農場から持ち込んだ子豚を剖検して見てくれないか」と頼まれました。

しかし、私が忙しかったので「渡邊君に頼んでくれ」と言って翌朝何気なし渡邊君に「昨日剖検した豚はどうだった」と聞くと「肝硬変みたい」との返事でした。流し台に残っていた臓器を良く見ると、確かに初めて見る異様な肝臓でした。その頃「PRRSは哺乳豚にも発生しているのではないか」と考え材料を集めていました。「ついでにこの肝臓も見ていただこう」と単純な思いで動衛研の久保正法先生に材料を送りました。1ヶ月ほどして久保先生が家畜診療所に訪ねて来られ、やや興奮気味に「山本さんえらい発見だよ、この間の豚からサーコウイルスが見つかったよ」と話されました。また、電子顕微鏡写真を見せながら、ウイルスの形がモザイク様であることなど説明されました。サーコウイルス病は偶然の結果から、1996年にわが国で初めて千葉県で発生したことが報告されました。

以上、回顧録になってしまいましたが、農場を巡回指導して見ると農家のみなさんが安易に諦めたり、決め付けてしまっている疾病の中に、思わぬ疾病が潜んでいることがあります。どうか「1症例を大切に」NOSAI連や家畜保健衛生所、動衛研、大学および各研究機関の協力を仰いで見てください。

著者のご紹介

山本輝次先生は、昭和36年に東京都立三宅高等学校をご卒業後、東京都農業試験場、明治乳業株式会社を経て、昭和40年に日本獣医畜産大学(現日本獣医生命科学大学)獣医学科にご入学され昭和44年にご卒業になりました。その後、栃木県酪農協同組合を経て昭和44年8月に千葉農業共済組合連合会にご就職になり、平成14年に同会をご退職後、香取農業共済組合のコンサルタント獣医師として現在にいたっておられます。その間、昭和63年から平成13年まで東京農工大学獣医学科応用獣医学非常勤講師及び現日本獣医生命科学大学獣医学科非常勤講師をお勤めになり、平成17年にはその一貫した臨床現場でのご活躍に対し、日本豚病研究会より第13回藤崎優次郎賞を受賞されました。

今後、本誌上におきまして先生の豊かな臨床経験に基づく有意義なお話を、可能な限りご紹介して参りたいと考えております。